特別寄稿

鶴見・由布をめぐる神々

富来　隆

鶴見岳（別府湾域）

試みに大分県の地図をひろげ、できるなら鶴見岳の頂上に立って四方の国見をする心持ちになって、地図を見ていただきたい。

夏至の太陽は、東北に三〇度の角度をもって日の出を迎える。鶴見山頂（聖池）より眺めれば、はるかに日出町の海岸からさらに遠く安岐の奈多沖に陽がのぼる。奈多八幡宮の森から徐々に日の足をのばして、杵築の住吉の浜（住吉社）に、それから日出町に入って熊野山に、次いで真那井の浮島八幡に、さらに早水の浜（小深江明神）にと、日の足が近づいてくる。別府に上っては亀川から鶴見権現社へと伸びてくる。この三〇度の線上に、このように多くの神社がつくられたのは偶然のことではない。この「天道さま」の線上にこそ、社地の選定がなされたのである。

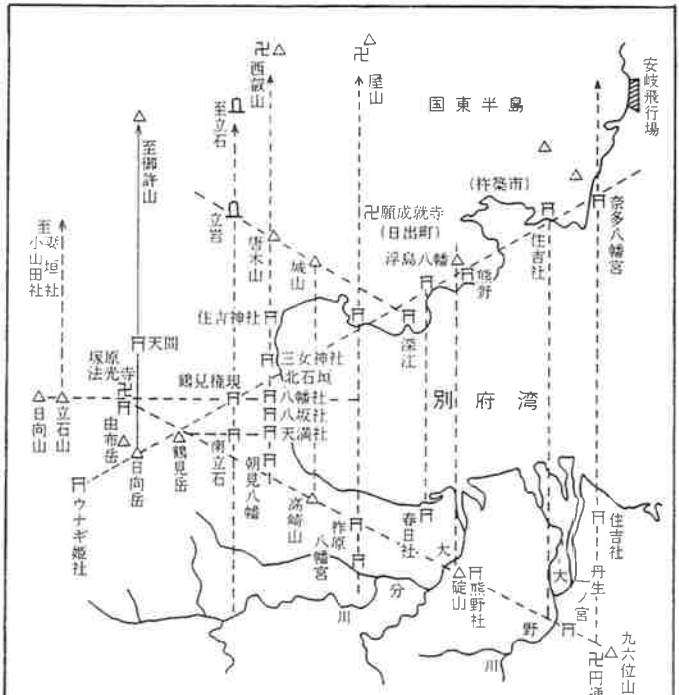
冬至の日の出は、それと対照的に東南に三〇度の角度をもっている。目をそちらに凝らせば、まず乙原ノ滝を、眼下にして、その向うに高崎山を望む。その先に柞原八幡宮があり、大分川畔の碇山には熊野社あり、さらに大野川畔には丹生一ノ宮がある。そして遙に九六位山（円通寺あり）の秀峰を望見する。

この、夏至と冬至との二つの天道線のあいだに、別府湾がひろがる。

ひと回りして眼を西に転ずれば、陽の入りとして、これらの線の延長（東西から各三〇度ずつの線）が由布岳を中にして、南は由布院の宇奈岐日女社から大杵社、ケサキ権現にとのび、北は塚原（法光寺）から安心院町・福貴野にと伸

びるのである。―由布院盆地のことは、次にのべる―。

それだけではない。東北と東南にのびる日の出の線先きの、奈多八幡と九六位山（円通寺）とをむすべば、別府湾をこえて南北の線となり、この両地点と鶴見岳とが正三角形を形成するのである。



鶴見岳から見た一つの世界（天道信仰）

鶴見岳より見れば、別府湾をそっくりわが内庭とし、北は国東から日出を、南は大分を、両腕に抱えこむようにして、壮大な一つの世界がつくられている。

そしてさらに別府湾の北と南との間には、奈多―九六位山だけではなく、南北線の結びつきがなお多く見られるのである。杵築の住吉社とは大野川畔の丹生一ノ宮社が。日出の熊野には大分川東岸の碇山（熊野社）が。真那井の浮島八幡に対しては、大分市の氏神たる春日社が。さらに国東・六郷満山（仁聞菩薩）の末寺たる赤松の願成就寺と、いわゆる大分川・大野川満山（日羅上人）の始とされる柞原八幡とが。それぞれ南北に結ばれるのもきわめて暗示的である。日出の城山と大分の高崎山とが南北に相対する（烽火の址あ

り）こともよく知られている。

そして別府の陸地に入ると、南からまず朝見八幡社、境川の天満社、ついで南石垣の石垣社（八坂社）、北石垣には八幡社が、さらに亀川・古市には三女神社（宇像社）があり、さらに北上して豊岡の住吉社に至る。さらに北には唐木山から西叡山にとつながるのである。これら南北の線が宇佐八幡を宗とする国東修験において〃北辰信仰〃の体現と見られるとなれば、別府湾をはさむ如上の南北線もまたこれの延長上にあろう。そしてこれが、鶴見岳から発した夏至・冬至の「天道線」を基本にして形成されていることは明らかである。

この鶴見岳（聖池）に対して、麓の鶴見権現社（東北三〇度線上）が春分・秋分の「天道線」、すなわち正しく東西線の基本として考えられたようである。そしてここに古人の苦心の存するところがうかがわれる。西から郡境の立石山（メンヒル）を一聖地とし、その東に塚原の法光寺（ここから由布岳に南面する）が建てられ、さらにこの鶴見権現社をへて東には北石垣八幡がつくられている。ここから別府湾を海上に出て、はるかに四国の佐田岬を指向することになる。

鶴見権現は、鶴見岳を神とまつる社であり、そこが一つの中心点となって、四方八方に（天道線、南北線の）線を引くことで理解がすすめられる。

西の立石山と通ずる正東西線のほかに、南・北にも「立石」を控えている。

鶴見権現の北に尼蔵岳（pits・tak日の山）をすぎて「立岩」があり（ここは唐木山、城山と三〇度をなす）、さらに北には山香の「立石」にたっする。この「立石」は雲が岳から東西線と妻垣社からの三〇度線との交点でもある。

鶴見権現を南に下ると、別府の南立石Π（ここは鶴見岳の真東にあたる）。北から「立石」、「立岩」、「南立石」と連なっており、その線上に尼蔵岳と鶴見権現社とがのっていることになる。この南北線をさらに南にのばすと小鹿山から、大分川の「竜原」、そして支流七瀬川に「荷尾杵」（ここは丹生水銀鉱山）をすぎて、はるかに傾山にま

で達する。

鶴見権現から鶴見岳西南にのばすと、由布院盆地の南縁（三〇度線）をすぎる。すなわち、先ず日向岳をすぎる。この岳が問題である。鶴見権現から西北三〇度の線が町境の南端・天間（あまま）社にのびるが、この社は宇佐の御許山から真南の線にのる。そしてこの南北線は由布岳、鶴見岳の中間の日向岳をすぎ、さらに雨乞岳にいたる。

このようにすべて、次から次へと関係が強まって行くが、さらに云えば、そういう線上、また線の交点にあたるところに、「立石」とか「日向岳」とかの地名が付けられているということを知るのである。エリアーデ（宗教史学者）が、くどいほど「立石」を太陽崇拝の聖地とすることを述べているのが、ここでもっともよく理解される。

さて、鶴見権現社をすぎる東西の線と、朝見八幡から北上して西叡山にたっする南北の線とが、北石垣八幡をもって、その交点とする。ここを交点とする意味は、はたして何なのであろうか。この社のすぐ近く（北と南とに）鬼の岩屋古墳群と、太郎・次郎の古墳群（百合若大臣（ゆりわか）物語り）とがあり、古代社会にあってこの付近が別府の中心域であったことを示す。また「豊後風土記」にみえる郡衙（か）（役所）が、この付近にあったらしい。北石垣八幡の周辺域は、まさしく古代における別府の政治・社会の中枢であり、そして鶴見権現社は、思想・信仰の中心を意味するものであった。

日月・星辰の思想に則（のっと）り、自然をそのままわが庭と考える。鶴見岳から東に広がって別府湾をすっぽり掩う正三角形の形成。そのなかに走る東西線と南北の線と。

これを基として、政治・社会・文化の〝一つの世界〟を建設しようという。まことに壮大な古代のロマンであった。それは、別府を中軸に、北は国東・速見と、南は大分とを結びつけて、はなさないものがある。これはそのまま、これからの別府の琴線として近未来にも強く鳴りつづけるものではないのか。

歴史はくり返す、という。だが歴史が再び同じ軌道をはしるわけではない。その意味を考えねばなるまい―ただこういうことは言えるのではないか―。高速道路が高原につくられると、必ずといってよいほど弥生時代などの遺跡と重な

ってくる。団地などの造成のときも同様である。かつて高地を生活の舞台にしていた時代につよくダブッてくる、等々ー。

そうだとすれば、奈多八幡の北に安岐の空港がつくられ、高崎山の南に新しいバイパスがつくられるとなれば、かつての鶴見岳・鶴見権現社からの「天道線」に沿って、あるいはその外側に並行するように、新らしい「高速道路」が思考される時代となりつつあると云えるだろう。

そうは言っても、市街地はやはり海岸部・平野部に展開されよう。高原・山丘の濫開発はかたくつつしみ、グリーンを保存するべきである。そのさい、北石垣八幡と鶴見権現とは、これからの別府にとっても中心地域たるべき位置を占めよう。

都市社会学の「同心円理論」（一九二五、Burgess による）は、今日もはなはだ有効な理論である。すなおに同心円的に発展することが、近未来の別府市にとって、一層の理想的な姿である。そのとき北石垣社・鶴見社の地区が、この同心円の中心域となる。そういう意味での、〃歴史はくり返す〃と言っても良いだろう。近未来の社会は、「人間を尊重し、自然を敬仰し」て発展する立場に立つことにおいて、また古代に通ずるものがある。

由布岳　（由布院盆地）

由布院盆地は東に鶴見岳（一、三七五m）由布岳（一、五八四m）をもち、四周を一、〇〇〇m以上の山々で囲まれる小盆地である。大分川の源流がこの盆地から流れ出し、西南の一隅が小さく開けて、此所から大分川の本流となる。

いま五〇〇mの等高線をもって形どると、由布院盆地は図のように巾二km、長五kmに及ぶほぼ長方形にちかい盆地をなす。西南の一角が僅かに開かれ、盆地内は四五〇～四七〇mほどの平地である。西半の中央部（字光永）に、里人の俗に島とよぶ五六〇mほどの小山がある。問題は、五〇〇mの等高線に沿って（ちょうどその縁辺に）数多くの神社Π をちりばめていることである。

神社のなかに幾つかの中心がみられる。ことに、鶴見岳と由布岳とにスポットを当ててみると、このことがよく分

る。

鶴見岳から東に、別府湾のほうに作った三〇度の天道線は、西にのばして、北には、塚原に、南には日向岳―宇奈岐媛神社―蹴裂権現の線となる。ウナギ姫・ケサキ権現には、由布院盆地干拓の伝承がある。そしてウナギとは、私見によれば、恐らく朝鮮語のundangi の音写であり、「湖沼」（いまの金鱗湖）をさしているものであろう。この伝承に類似の阿蘇明神の活躍、筑前のトドロキの崗（裂田の溝、『神功皇后紀』）、ならびに大分市丹生川域、近江の琵琶湖北の余呉湖、また信州の佐久地方（サク＝裂）などの物語りについては省略する（詳しくは大分大学・教育学部『大分川』所収の拙稿参照）。

さて、由布岳をめぐって著名な二つの物語がある。

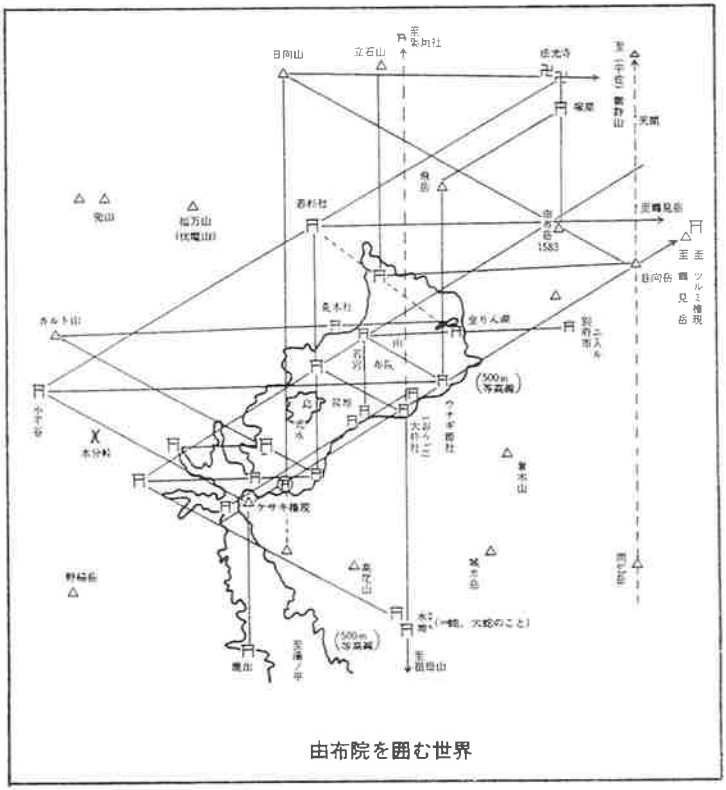
一つは恋くらべの話であり、一つは背くらべの話である。

その1、由布岳（一、五八四m）は鶴見岳（一、三七五m）と東西に並び立ち、東に別府湾を望む秀峰である。この由布岳と、九州中央（県の南境）に聳える祖母岳（一、七五七m）とは共に雄渾な〃男性〃として競い、〃女性〃である鶴見岳に恋争いをした話がのこっている。「その昔、三山は相並んでいたが、恋に破れた祖母岳は涙をおとしながら此の地を去って、今のように九州中部の奥深くに身を隠した」と伝えられる。その後日譚までいろいろと付け加えられ、「鶴見岳はために熱い湯をふき出した」との話もあり、鶴見岳の名は、その山頂が「ツルミ」て見ゆるの謂なり、などとも云われている。因みに、「県南に去った祖母岳が、そのとき流した涙のあとが今の志高湖である」、とされてもいる。

その2、由布岳にまつわる今一つの話は、背くらべのことである。「日向の国の高山とよばれる山が、その高さを誇って由布岳に背比べを申込み、はるばる日向からやって来た。ところがやって来てびっくり、案に相違して自分のほうがあまりに低いので、そのままそこに動けなくなってしまった。」由布岳東南麓の別峯、日向岳（一、〇八八m）がそれだ、と云われる。

由布岳の西北に6km離れたところに日向山とよばれる山があるが、これについては右のような伝説は存しない。ただ、このように近く、しかも豊後のまん中に「日向岳」・「日向山」と二つも日向（ひゅうがの名のつく山峯が存すること、そして由布岳西北の日向山と東南の日向岳とを直線でむすぶと、それが由布岳の山頂を通ることになる。こういう方向線をもつことになる。これは問題を考えるうえに、大きな示唆となるものではないのか。しかもこの方向線は、東西に対してほぼ三〇度の角度を示している。この角度が問題である。

岳・嶽（タケ）と名の付く山峯が尊崇される聖なる山容であること、それがとくに竜蛇神とむすびつくことはすでに記した。往古にあって、人々は日月星辰・山川叢沢の多くに神霊の宿るものと認めた。ことにそれが道教の入るに及んでは太陽神・北斗神などに、政治と宗教とにより（日常生活に）強制力の作用をしたあとをうかがわせるものがある。



由布院を囲む世界

それはそれとして、人々の生活・慣習のなかにもこの太陽崇拝の思想が浸透したこと、それをこの日向（あるいは日出・日明など）の地名にも見ることが出来るのである。

由布岳から東南ー西北に三〇度の方向に、二つの「日向」とよぶ山峯をもつことも異とするに足りるが、それだけ由布岳の信仰が厚かったことを示すものであろう。先年「豊国」の名称の起源に関る「ウナデ」を祀る社祠をたずねて福岡県の京都郡を歩いた折、刈田町のウナデ神社で「ここから由布岳が望めます」と話されて驚いたことがある。中津市のほうでは、「豊前海から遠望する由布岳がもっとも美しく、豊後富士というに相応わしい」と言われたこともある。

一、五八四mの由布岳は、一、〇〇〇m級の山々がひしめく周囲からも、やはり一際ぬきんでているのである。さて、この由布岳から東南三〇度の天道線を、日向岳をすぎてそのまま延ばすと豊後の国分寺を指向し、また由布岳より東北三〇度に天道線をのばすと日出町大神郷に大神八幡をすぎるのである。この社は宇佐宮の南なる大蔵山から東南三〇度の線上にあり、両線の交点となる。大神郷ひいては宇佐大宮司たる大神ノ比義の名が、この地に在ることの因縁を感ぜずにはいられない。

ところで由布岳の東南なる日向岳より、今一つの天道線を東北・西南に求めると、ここに驚くべきことが見出される。それは、鶴見岳の神を祀る鶴見権現社と由布岳の神をまつるといわれる宇奈岐日女社（六所権現）とをむすぶ線が、正しく（東北ー西南に）三〇度の線となり、それが鶴見山頂の「御神池」をすぎ、日向岳をも通っているということである。この天道線のよって示すところは、「日向岳」が由布岳と鶴見岳とを、そしてまた如上の二社をも結ぶ「天道山」の位置を占めている、ということになる。

それだけではない。日向岳から南北の線をひくと、南には雨乞岳にとどき、真北には天間社をすぎて、おどろくことには宇佐宮の神体山なる雲ガ岳・御許山に達するのである。こういう南北線となるのである。

さらにいま一つの南北線として、宇奈岐日女社はその真北に「飛岳」をひかえている。タケが竜神をあらわす霊峯な

ると同時に、トビの語もまた竜蛇神をあらわし、宇像神また八幡神と深く関わること、さきに記したとおりである。これによってみれば、飛岳とは二重に竜蛇神の存在をしめす霊峯である。すでに記した由布院盆地の干拓にかかる物語に宇奈岐日女と蹴裂権現とのほかに、湖に住む竜神の存在があったことが想いおこされるとともに、この竜神こそ飛岳の神であり、さらに宇奈岐日女神なのではないかとの思いが離れないのである。

いま一つ、由布岳の真北に「塚原」の地がある。多くの古墳群があるところである。この塚原にある社、すなわち男能濃松社は、由布岳の真北にあると同時に、右の飛岳から三〇度にあたる交点の位置をしめている。由布岳明神を祀ることは申すまでもない。

さらに由布岳の西北にそびえる立石山（一、〇五八m）はその北に宇佐・竜王山と呼応し、真南には由布院盆地の川上・並柳の天満社があることも面白い。「立石」が太陽を祀る聖なる呼称であることはすでに記した。エリアーデやホカートを、おもい出させられる。東西線では西に日向山をひかえ、東に火男火売神社（鶴見権現）をひかえて、東西線をなす中心の山ともなっている。

このほかにも南北の線を、なお引くことが出来る。スギの巨木で知られる大杵社からは、北はるかに宇佐の妻垣社、さらに小山田社にとどき、南は水地（ミズチ＝虵＝竜蛇神）の御霊社と呼応し、さらに南には『平家物語』の竜蛇神婚譚で知られる穴森社（神原）をすぎて、祖母山頂にたつするのである。ここに八幡神と祖母山神と（ともに竜蛇神）が、南北に対応して結びついていることがよみとれるのである。

三〇度の「天道」線のほかに、正しく南北の線が、数多く引かれるということは、いわゆる北斗信仰、すなわち北極星の信仰であるとしても、それが何故にこの由布院盆地のうちに目立つのであろうか。如何なる特別の理由が存するのであろうか。四周を高山にかこまれた盆地であるからこそ、ここに凝縮してみられること、いわば日本社会の縮図として認められることである。